

学校部活動における外部指導員の現状と課題

Current trends and issue of engagement of external coaches for school-based extracurricular sport activity

1K06B005 浅水 雄之

主査 作野 誠一 先生

副査 木村 和彦 先生

【目的】

学校運動部活動は中・高等学校を通して多く学生が経験をしている。日本中学体育連盟の調査によると平成23年度の加入率は男子生徒で74.3%、女子生徒で52.0%である。また、平均活動時間は一日当たり118分となっている。このように参加者は終業後の多くの時間を部活動に割り、活動をしていることが明らかになった。またその目標として、全国高等学校総合大会や国民体育大会など全国規模で開かれる大会があり、部活動での成果を試す場となっている。このように部活動は生徒にとって学生生活の重要なコンテンツの一つである。しかし、肝心の指導する側の課題は多い。近年、問題に挙がることの多い顧問教員による体罰の問題、指導経験のない指導など教員が指導をする形だけでは成り立たなくなっていることが見て取れる。そのため、学校のみで展開されてきた部活動は外部指導者制度を取り入れ、この二者が連携して取り組む構造になってきている。しかし、まだ制度的には未成熟で効果的に活用ができていない現状がある。これらが連携して互いの長所を引き出すことができればより良い部活動が実現するであろう。

以上より、本研究では外部指導員、顧問教員の現状を関連文献から検討する。そこで浮き彫りになった課題を踏まえ、今後の運動部活動、外部指導員の発展に向けての改善策を提示することを目的とする。

【方法】

本研究は文献研究によって行われた。まず、運動部活動の歴史を辿り、現在の運動部活動に至った経緯を明らかにした。それを踏まえた上で顧問教員と運動部活動参加生徒が抱えている問題を明らかにし、外部指導員が部活動に参加することで生まれるメリットを明確にする。

【結果】

第一節では学校部活動の歴史を明らかにした。1870年頃、欧米スポーツは文明開化に伴って外国人教師などによって持ち込まれた。大学運動部員が中等学校に訪問指導を行い広めることで現在の中学・高校の運動部活の軸ができ、校友会に教員が入り、指導は教員中心へとシフトした。また、1900年代から大学の影響などにより勝利至上主義を掲げる部活動が増え、戦争の激化に伴い軍国主義が部活動にも浸透し体罰などの問題が生まれた。また、戦後の東京オリンピックなどによって再び勝利至

上主義が蔓延した。さらに、教員が指導を始めた頃からほとんどの時期において運動部活動に教育的意義があると言われていることが学習指導要綱によって明らかになった。しかし、運動部活動の立場のあいまいさから顧問教員に大きな負担が長年かかっていることも分かった。近年では正式に教育活動の一環として認められ、地域との連携によって運動部活動を運営することが好ましいとされるようになってきている。

第二節では顧問教員の現状を明らかにした。顧問教員の多くは熱意を持って指導を行っていることが分かった。しかし、時間外労働の増加や指導力不足、手当が安価といった顧問教員への負担が大きいことも指摘されている。また、指導力不足や体罰に伴う生徒との信頼関係の低下が生まれていることもわかった。現在の構造では問題が多く、解決策を講じる必要があることがわかった。

第三節では外部指導員の現状を明らかにした。外部指導員は運動部活動の指導者不足を解決するだけでなく、他の効果も期待できることが分かった。その有効性は2002年から2012年までに3倍近くに外部指導員の数が増加したことから明らかである。また、地域全体の取り組みとして外部指導者を派遣している自治体があり、様々な種目に派遣し指導を行える環境ができつつあることが明らかになった。

第四節では前節までの内容をふまえ、顧問教員と外部指導者の関係性を指導レベル、報酬とモチベーションの観点から比較・検討した。技術指導レベルは外部指導員が高く、教育指導レベルは顧問教員が高い。また、安価な金銭的報酬によるモチベーションの低下は認められず、生徒に対しての指導に重きを置いていることが明らかになった。互いに異なる種類の指導に優れていることから、適切な役割分担によって部活動指導を行うことが望ましいと考えられる。

【考察】

互いの指導能力の違いから、分担して運動部活動を行うときには、互いの指導の意味を理解することが必要となる。また、生徒の自主的な活動を重視しながらも、行き過ぎた勝利至上主義など教育的意義から逸脱しないように注意することも忘れてはならない。